

るよし

●第三萬國動物學會概況(前號の續) 部會に於て朗讀せられ若くは提出せられたる論文及其著者は左の如し

第一部

- 一 細胞論に就きて
アダム、セヂキック(英)
- 二 深海の動物研究
キクトル、ヘンゼン(獨)
- 三 「ローラン」(船名)の海産物研究
公爵 ローランボナバルト(佛)
- 四 北海深處の探究
チエー、エルリユートケン
- 五 動物個々の變異と種の起元との關係
ダブリユー、ビー、スコット(米)
- 六 有脊椎及無脊椎類に於ける傳導(神經)纖維及其位置
スチーフアン、アパチー(匈)
- 七 種の變異に關する機械的の考案

シヤル、ジャネー(佛)

八 一定方向の進化及び自然淘汰の無功に就きて

テオドル、アイメメル(獨)

九 生物進化の法則

セリーヌ、ルノーツ夫人

十 北方の動物に就きて

エス、ブルシーナ(澳)

十一 「フリンセス、アリス」(船名)の動物研究

ジュール、リシヤール(佛)

第二部及第三部

- 一 歐洲露國の動物
エヌ、ゾーグラフ(露)
- 二 鯉魚の骨質棘狀體に就きて
レオン、ヴァイヤン(佛)
- 三 「チノソーリヤ」類の分類其由縁
- 四 ボルネオ中部に於ける動物學的旅行の概況
ヨット、ビュチユーヘル(蘭)

日 五 十 月 二 十 年 九 廿 治 明

- 五 丁抹國に於て爲したる伯刺西爾國洞穴の古代哺乳類の研究
チエー、エル、リュートケン(丁抹)
- 六 猛鳥類の分布
バウルダー、シャープ(英)
- 七 公果地方産の爬蟲類及兩棲類の新種
エフ、モクカール(佛)
- 八 スカンデキア産魚類に就きての著述中採用したる元理
テー、アー、スミット(瑞典)
- 九 駝鳥、極樂鳥及無翼鳥に就きての所望
エム、フォレ(佛)
- 十 哺乳類の齒の發達
ヴェー、レッツ(瑞典)
- 十一 脊椎類の胚の蔽護器及附屬器に就きて
リヒアルド、ゼーモン(獨)
- 十二 擬猴類の胎盤
アー、アー、ヴェー、フレブレヒト(蘭)
- 十三 テフ鯨類の齒に就きて
エヌ、ゾーグラーフ(露)
- 十四 動物胚ト植物との類似に就きて
セクーヌ、ルノーツ夫人(佛)
- 十五 龜類の解剖上一二の疑問に就きて
ヨット、エフ、ファンベムリン(蘭)
- 十六 「ピセカントロパス、エレクタス」即ち人類と猿猴類との中間動物
エー、ヂェボイス(蘭)
- 十七 「レビドステテウス、アマア」及鯨の發達中二三の問題
バッシユフオード、ヂーン(米)
- 第四部及第六部
- 一 兎の繸蟲類分類
シー、ワーデル、スタイルス(米)
- 二 北米産外部寄生類二三に就きて
五 島 清 太郎
- 三 珊瑚の分類
シドニー、シェー、ヒクソン(英)
- 四 和蘭所屬印度及馬來半島の蛭類
ラファエル、ブランシャール(佛)

五 タチウーの臨海實驗所

エドモン、ペリエー(佛)

六 蛭類の排泄器 ハーボルシウス(蘭)

七 「クレブシチ」(蛭)解剖中或る新事實

アー、コブレヴスキ(露)

八 被囊類の心臟の發育

シャル、ジュラン(白耳義)

九 「ヂスタプリア」幼蟲の心臟上心臟、周心臟及根

部 同 上

十 蠕蟲類の分類 エドモン、ベクエー(佛)

十一 サソリの淋巴系

アー、コワレヴスキ(露)

十二 ゴカヒの淋巴系

同 上

十三 寄生橈脚類の發育の初段

ヴェー、シムケヰイッチ(露)

十四 アゾールス島及セネガル海岸の新軟體動物

ペー、ドールツェンベル(佛)

十五 「オーウエニア」の隔膜中の新器官

ジェー、ギルソン(白耳義)

十六 蛙の心臟の發育

ヴェー、サレンスキ(露)

第五部

一 蟻の多形現象及消化器除去

チェー、エメリー(伊)

二 蟻及白蟻の巢中に棲息する動物

エー、ヴァスマン(蘭)

三 トンボに就きての新知識

エドモンド、セリロンシヤム(白耳義)

四 昆蟲の偽ミ、クリー(倣擬)

エム、チェー、ビーペルス(蘭)

五 燕形蝶類の種の起元及其相互の關係

デオドル、アイメル(獨)

以上列記したる論文中此處ニ特筆せんと欲するもの二箇

明治廿九年十月二十五日

あり一はステーション、アパターの神経纖維に就きての講談及其示されたる顯微鏡的の標品なり氏は數年以來殊に神経を研究し遂に從來人の嘗て見ざりし氏の所謂神經始元纖維なるものゝ存在を確認し且つ其從來神經纖維及神經細胞と稱せしものゝ中にあることを證明せり然れども多數の學士は氏の所謂始元纖維なるものゝ實存を疑ひ加之其從來神經細胞及神經纖維の中に在りと云ふに至りては特に信を措かさりしと雖も小生の實驗せし處に依ればアパターの標品は實に判明にして氏の講述せる事實に至りては毫も疑を容るゝの隙なしと信ず但し氏の推論は別物なりとす

他の注意すべき論文は即ちデュボイスの「ピセカントロパス、エレクタス」に就きての講述なり同氏が先年此化石骨をパタキアに於て發見し其記事を公にするや諸學士は或は其を以て全く人類の骨なりとし或は發見者と同じく人類にもあらず又現今存在せる猿にもあらず其中間の動物に屬せしものなりとし諸説紛々たりしが今回の討論

を公平に判する處多數學士の説は該骨を以て人類に屬せりと云ふに在るか如し但し發見者は其初説を維持せり今此報告を終らんとするに際し一言すべきは今回小生の出席は我邦動物學を諸外國に紹介するの一助と成りたることと信ず

(完) (官報轉載)

●東京動物學會 にては先月都合に依り會日を變易して二十八日(第四土曜日)午後二時より月並例會を理科大學動物學教室内に開き講演者第一飯塚啓君は東京産イトメに就て其習性形態變化及び産卵發育等を講演せられたり其精細の點は演者に乞ふて本誌に登載す可けれども其概要を記すれば左の如し曰く抑演者の此研究に従事せられしは曾て該會例會に於て大澤教授の此イトメに就きて講演せられたる事實及び其標品を一見尙深く研究せば面白からんと考られしよりなり最初此研究の爲め隅田川に行きて採集を試みられしは實に本年七月十一日なれども同月十六日他の研究の爲め三崎臨海實驗場に出張せられたる爲め一時中止九月歸京同月十八日同採集を試みら